

最近の中国ナマコ事情と陸奥湾産ナマコの対応方向

澁谷 長生

弘前大学農学生命科学部園芸農学科食農経済コース

(2009年11月8日受付)

はじめに—2008年から2009年ナマコをめぐる環境の激変

昨年アメリカに端を発した世界経済不況の嵐と中国産養殖ナマコの増大などによって、中国国内のナマコ市場は昨年末にかけて買い手不在の状況となった。中国国内の輸入卸の段階では荷が動かず、そのことによって日本国内の加工業者でも大量の在庫を抱える事態となった。そのため日本国内、とりわけ陸奥湾や瀬戸内などでは浜値が大幅に低下し、これまでナマコ景気に沸いた各浜では先行き不安の中で新年を迎えることになった。

他方そうした中であっても、年末あたりから陸奥湾産のナマコに対し引きが入り始めるなど荷の動きも確認されており、中国国内の需要動向の変化も伺えていた。

そして新年明けから中国の旧正月にかけて、中国国内のナマコ市場は徐々にではあるが好転の兆しが見えるようになってきた。現在の中国のナマコ市場は力強さを取り戻しつつあるようにも思える。しかし未だどの辺に落ち着くのか明確に判断できる状況にはない。

本稿でこれまで筆者が中国国内及び日本国内での調査によって得られた様々な情報を紹介しながら、中国国内のナマコ事情とそれを踏まえた陸奥湾産ナマコの今後のあり方についてまとめておきたい。

1. 日本産ナマコ及び青森県産ナマコの動向

1) ナマコ輸出動向

まず我が国のナマコの動向をいくつかのデータから確認しておきたい。一つは我が国の乾燥ナマコの輸出動向である。図1に示したように、2007年をピークにして2008年は輸出量、輸出金額とも低下している。

これを2006年、2007年、2008年の3カ年の月別輸出量(図2)、輸出金額(図3)、輸出単価(図4)で見ると、2008年はその前2年間に比べ、輸出量、輸出金額では11月及び翌1月に大きく低下している。これに対し、輸出

単価では、2008年内では特に単価の減少は見られなかったが、年度明け2月、3月に大幅な落ち込みとなっている。

これらの図で確認できる点は三つある。乾燥ナマコの輸出量や輸出金額は各年のそれぞれの月ごとの特徴とは大きく変わることはないが、2008年はそれらの数値が落ちる幅が大きかったことが第1点である。

また輸出量は2008年2月、3月には大きく上昇し、かえって2007年の2月、3月よりも増えていることである。それだけ荷が動いており、そのことは2009年に入りナマコの取引力が回復しつつあることが第2に確認できる点である。

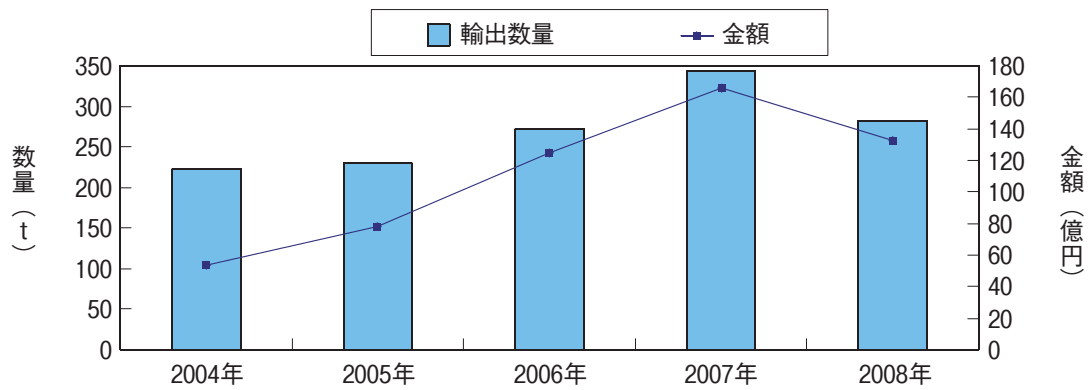
ただそうは言っても輸出単価では前2年に比べるとかなり低い水準にあり、量は捌けているが、値段が低迷している状態であることが第3の確認点である。

2) 青森県産ナマコの動向

次に図5、6に示したのは、青森県の2004年から、2009年3月までの各月別ナマコ漁獲量と金額をである。漁獲量では2009年1月から3月にかけては2007年、2008年と比べると減少していることがわかる。漁獲量水準は2005年、2006年水準となっている。また金額では漁獲量の減少と浜値の低下が合わさり、近年では最も低い金額で推移しており、2008年末にかけては5年前の2004年の水準と同程度となり、さらに年明けの2009年1月、2月には最近にはない金額となった。

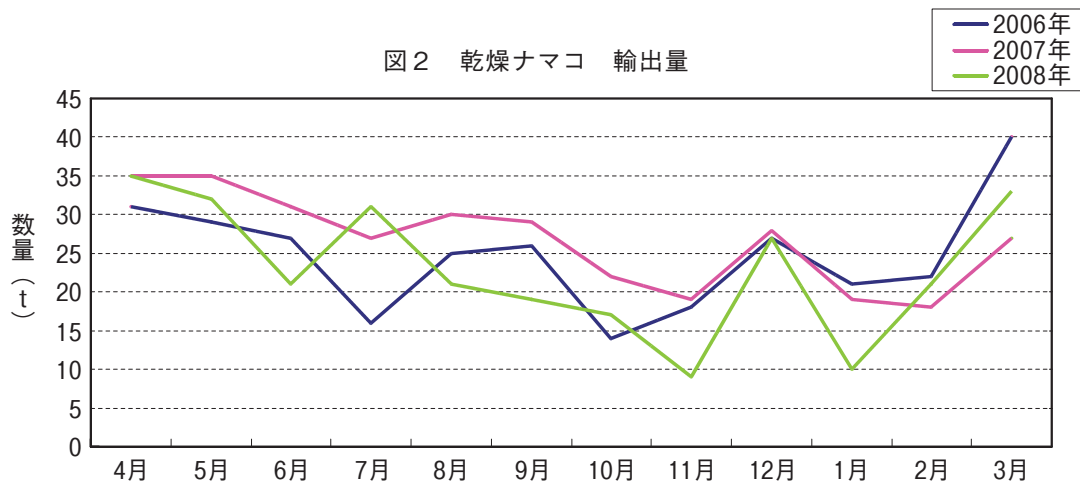
しかしながら、3月になると前述した中国の動向を反映して取引価格も上昇し、浜値も上向きで推移してきたことも確認できる。いずれにしろこのように中国国内のナマコ市場の動向に青森県産ナマコが大きな影響を受け、大海の小舟のように揺り動かされてきた1年であった。

図1 乾燥ナマコ輸出数量及び金額



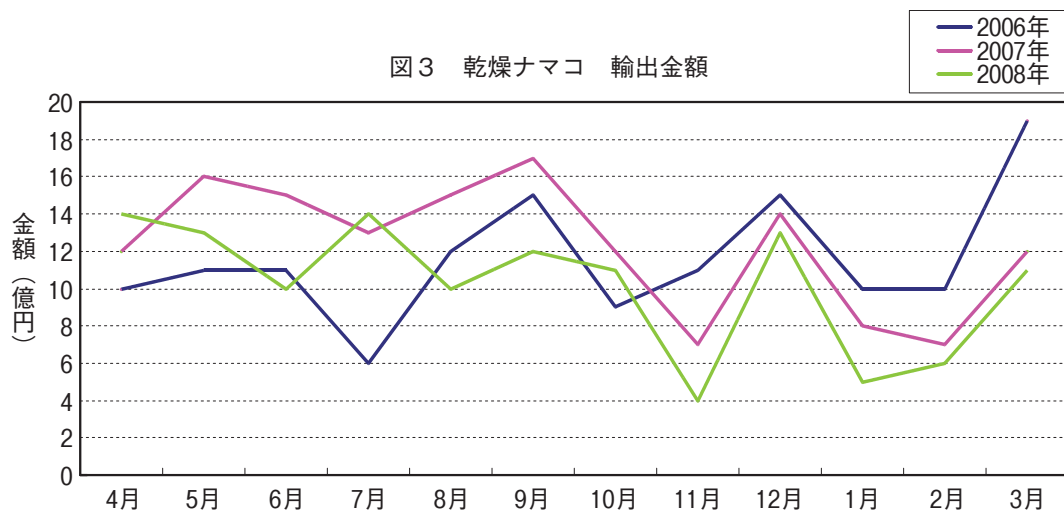
資料：農林水産省データより作成

図2 乾燥ナマコ 輸出量

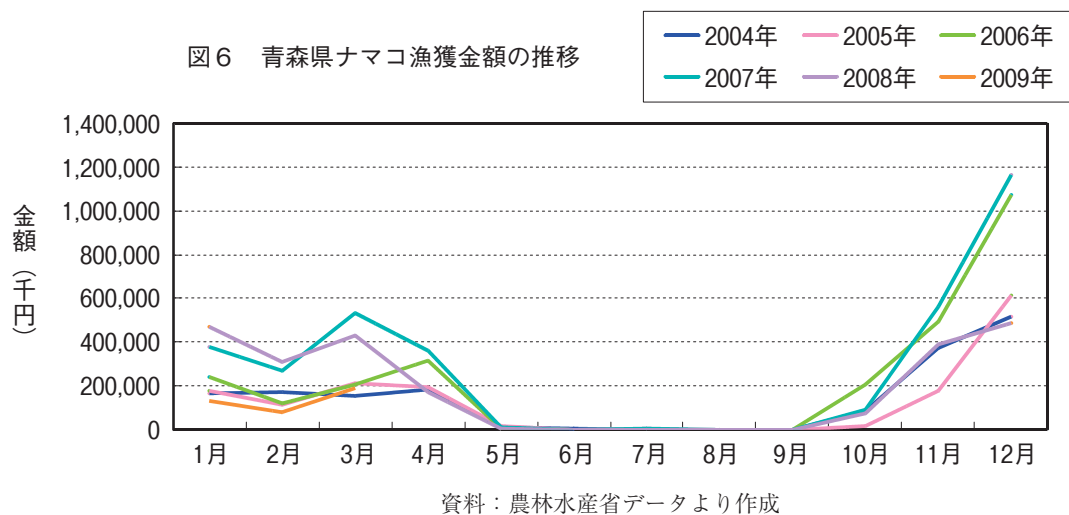
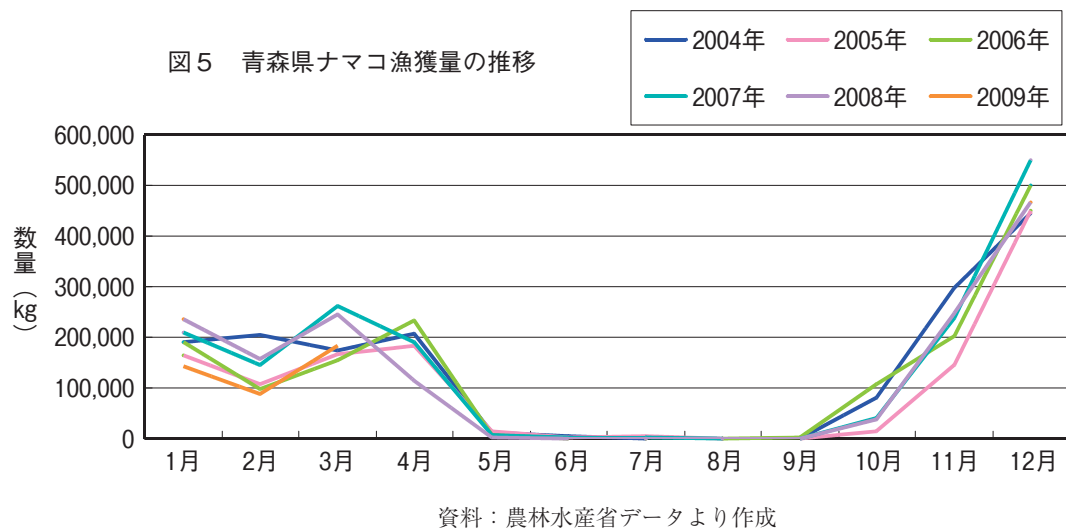
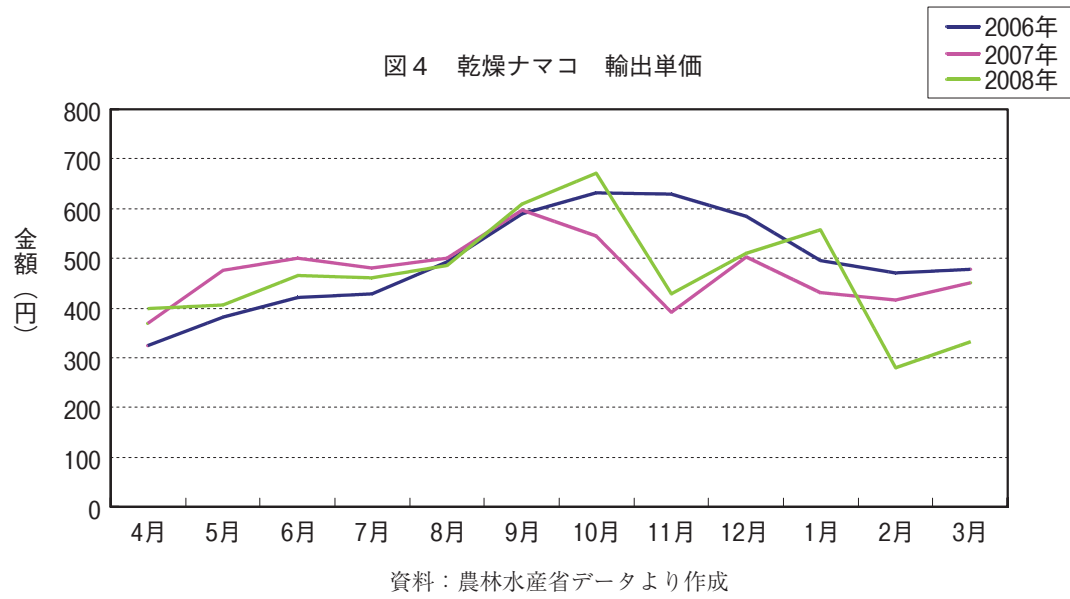


資料：農林水産省データより作成

図3 乾燥ナマコ 輸出金額



資料：農林水産省データより作成



2. 2008年度の中国養殖ナマコ事情

1) 2008年産中国養殖ナマコの動向

2008年は中国国内の養殖ナマコは予想外の生産量増加の年であった。その要因としてあげられているのは、水温の上昇、中国国内の養殖技術の向上と近年のナマコ価格の高騰を受けて新規に参入する養殖業者の異常な増加である。特にナマコ種苗からの生体回収率が通常年では50-60%であったものが、2008年は90%以上となったことが生産量増加に大きく寄与していると言われているが、それも含めいくつかの複合的要因が重なったためであった。

生産量増加傾向にもかかわらず中国国内の卸などは従来のパターンを踏襲して、ナマコシーズン突入直後には、高値基準価格で仕入れたが、ナマコ水揚げ量の増加を反映して、シーズン半ばには約30%以上も価格が急落するという事態が生じた。そのため多数の卸が販売困難な高値の在庫を大量に抱えるようになったという。そのため、これまで取引を行っていた日本産ナマコの仕入を控えるようになり、日本産ナマコの動きが停滞することになったのであった。

このように2008年は中国産養殖ナマコが市場の予想が外れ、過剰生産となり、そのことによってナマコ市場全体の相場が下落する事態になった。

2) 中国ナマコ関係企業の動向

当然のことながら、ナマコ市場の相場下落と、収益の低下により、企業体力に乏しい多くの中小ナマコ養殖事業者、ナマコ加工業者は中国国内での価格競争と収益悪化による経営難で淘汰される事態が生まれている。中でも中国国内でも大手の加工企業である大連市A社でさえ倒産するという事態は、ナマコ産業をめぐる状況の厳しさを関係者に改めて思い知らせた。

3) 中国ナマコ養殖事業の巨大化

しかし他方では、大手ナマコ生産事業者・ナマコ加工業者達は安定性の高い市場を形成するような動きを加速させてきた。例えば中国国内のナマコ業界が苦闘しているこの2009年の時期に、山東省華南集団などの中国現地財団が大規模なナマコ養殖事業を展開する計画もある。そのための技術支援を弘前大学農学生命科学部吉田などに要請してきている。

これらの取り組みの特徴は、大手小売企業、養殖ナマコ専門の加工メーカー、並びにナマコ養殖企業等が連携しつつ、需要と供給のバランスを考慮した多様なナマコ製品の製造に基づく戦略的販売をしようとしていることである(写真1～6)。したがってこうした大規模養殖事業の展開は、中国国内の養殖ナマコへの影響は避けられないだろうが、日本産の輸入ナマコ市場にはどのような影響があるか今のところ予測がつかないが、その養殖ナマコの品質によっては多大な影響も考えられよう。



写真1 ナマコカプセル商品



写真2 ナマコカプセル加工工場



写真3 ナマコカプセル加工場内部(1)



写真4 ナマコカプセル加工場内部(2)



写真5 ナマコカプセル加工場内部 (3)



写真6 ナマコカプセル加工場国際規格取得証

4) 品質悪化問題

近年特に指摘されていることは中国産養殖ナマコを製品加工した場合、歩留まりが悪化する傾向にあり、そのため製品原価が高くなり、利益が低い状態が生まれるようになってきたことである。中国産養殖ナマコは肉薄のため歩留まり悪化の要因と言われている。そのためもあり中国国内の加工業者は塩を大量に混入したり、糖質で重量を増加させた物などを製造し、品質を落として販売している例が多くなっているようだ。

こうした粗悪品の製品化と同時に、日本産の輸入乾燥ナマコも中国国内の流過程で、乾燥から戻され、塩、糖質、膨張剤などを注入され、再び乾燥するなどの再加工が行われ、それらが売られているケースも増えているとも言われている。

写真7に示したのは悪質な例ではなく、日本産乾燥ナマコのうち、ねじれのある物を再加工して真っすぐにするためにナマコ一個ずつ、針金を入れている様子である。このような付加価値づくりは真面目な対応であるが、これに留まらない再加工があるのが実態である。



写真7 日本産ナマコの再加工

5) 日本産ナマコ製品の品質保持をどうするか

例えば日本の乾燥ナマコ業者が最高品質の乾燥ナマコを輸出したとしても、中国国内のエンドユーザーの手元に届いたときには、日本の加工業者からすれば、似て非なる乾燥ナマコになっているということである。

中国国内では乾燥ナマコに塩が入っていない物の方が逆に珍しく、乾燥ナマコには塩が入っていることの方が当然という受け止め方もされるという逆転現象も生まれている。この意味で中国国内で最高品質と言われている日本産乾燥ナマコの品質を維持したまま、どのように中国国内を流通させ、エンドユーザーまで届けるかということが課題となっていると言えよう。

3. 中国におけるナマコ流通の差別化と差別化

1) すすむナマコの差別化・差別化

これまでは中国養殖ナマコ製品も日本産輸入ナマコ製品も同様の原材料、製法、品質であると考えられてきた。そのため大量に流通する中国養殖ナマコ製品に価格が引上げられ日本産ナマコ製品、特に青森県産ナマコは苦戦を強いられてきた。しかしながら最近は同じナマコ製品であるが中国産と日本産とは基本的に違う物であるとの認識が卸、レストラン、ホテルそして消費者の間で徐々に浸透し、差別化・差別化が進んでいると言われている。

こうした差別化・差別化が進んできた要因は、前述したように中国ナマコ製品の急激な氾濫とそれに伴う品質の極端な低下が大きい。利益追求のため糖分や塩分を添加されたナマコ製品は重量は増すが、消費者に供給された場合、食感が悪くなり、風味が変化するなどの影響があり、食品としての安全性にも疑問が生まれている。

2) 中国養殖ナマコの安全性

同時に大量の養殖ナマコの登場は養殖ナマコそのものの安全性を問い始めている。病気抑制のためや成長促進のための各種薬品の利用、それらに伴う環境悪化が折にふれ指摘されてきている。これらのことから次第に中国産ナマコ製品の評価が厳しくなりつつある。

こうした中で日本産ナマコ製品は原料自体も天然であり、尚且つ高い技術で製造され安全性も高いことは評価として定着してきた。さらに注目すべきは流通途中で中国の業者に多少糖分や塩分を添加されたとしても、基本的な加工工程がしっかりしているため、変質しにくく安全性も高いとも評価されているようだ。

以上のことを踏まえ、日本国内ナマコ加工関係者の中には将来的には中国産養殖ナマコと日本産ナマコは同じ市場ではなく、別々の市場として独自に展開してゆくのではないかとの見方もある。最近の動向はその出発点とも考えられ、そうした市場差別化を如何に定着させてゆくの戦略が日本国内のナマコ関係者は必要と感じている。

3) 中国ナマコの流通システム混乱とリスク問題

2008年はオリンピック開催とチベットの暴動等が影響し、中国国内への通関業務の厳格化がすすみ、中国の各港、空港から中国国内への流入に大きな支障があった。しかも乾燥ナマコのような主に香港から中国国内へ流入する際にも同様な状況であった。

輸入食品の規制が厳格化、通関、検疫の遅れから香港から中国国内に流通させるのが非常に困難となった。日本産ナマコの大幅な輸出鈍化が進み、日本の加工業者は不安感から在庫を嫌い、原価を割り込んでも輸出するようになった。

4) 政治的リスク

中国への輸出で問題になるのはこのような政治的リスクである。中国においての政治的リスクとしてはいくつかあげられるが、まず反日感情の問題がある。日本の常任理事国入り問題に端を発した2005年4月の反日運動では大規模なデモが行われ、上海では領事館や日本料理店が破壊されたほか、日本製品のボイコットが叫ばれ、商店から一時的に日本製品が撤去される動きもあった。この問題は非常に複雑な問題であり、容易に解決されるものではない。今後とも同様の反日運動及び日本製品排斥運動が起こる可能性がある。

ついで問題となるのは、中国ではWTO加盟に伴う各種規制緩和のための法律も含め法律関係の整備が進んでいるが、その運用・解釈が地域によって異なる場合である。地方政府においては策定した計画や条例が突然変更されるケースがあり、例えば上海市政府の誘致に応じて上海市政府が整備した地域に進出した企業が市政府の計画変更により立ち退きを迫られるという問題も生まれた。

さらに今回のようなオリンピックという国家的行事の開催に伴う通関業務の変更、あるいは自然的大規模災害などの発生による変更など通常の業務の変更を促す要因が多様多様に存在することが中国の特徴である。来年には上海万博も予定されており、通関業務の変化も予想される。

現在香港は中国への返還後は特別行政区として事実上

1国2制度のような扱いを受けているが、中国本土との結びつきをますます強めていく中で、将来的にはその地位がどうなるか不透明である。ただし当分の間は現行のまま大きな変化はないと思われる。いずれにしろ中国ではこれらの政治的問題の発生するリスクが高く、事業を行う際には慎重に検討する必要がある。

今年は特に影響をもたらすような国家的行事はないものの、突発的に起こり得る不測の状況に常に晒されていることは言うまでもない。しかもチベットや中国各地で頻発している暴動、テロなどの不安定な状況には変わりが無い。突如、通関業務が厳格化される可能性は十分にある。

5) ナマコ流通への新しい取り組み

そのような事態に備えるために、日本国内の水産加工業者の中には、中国内の顧客と綿密に意見交換し、輸送コストは少々上がるものの、香港の運送会社数社と緊急時には優先的に、且つ、確実に中国国内に運送してもらえるよう契約を取り交わすなどの自衛体制をとっている例も生まれている。つまり通関業務の変更に伴う各種のリスクを確実に回避するために製品輸出の輸送速度を上げ、いち早く中国国内に商品を移動することが重要との考えである。

乾燥ナマコは相場の変動が大きいこともあり、しかもその相場に応じて収益を確保しようとの販売戦略を前提にしていたため、ナマコ相場を観察しての販売に徹して日本国内でストックすることが多かった。したがって中国国内での流通に問題が発生した場合には、製品が日本国内で停滞してしまうことが多々あった。それを前述のように日本国内にストックせずに製品完成後、迅速に香港に運び、日本出発後、又は香港到着後すぐ決済する方向で活路を見いだそうとの取り組みである。

こうした対応は当然相場による差益は見込めなくなるが、そうすることによって流通システムが混乱をきたしたとしてもストックが少量で済み、決済まで終えているので大きなリスクを回避することになる。

4. 2008年金融危機による大きなダメージとその後の展開

1) 金融危機の影響

金融危機による香港、深セン、上海などの商業都市への影響は特に大きく、消費に急激な歯止めがかかった。香港は輸入ナマコの集積地であり消費地であったが、香港のナマコ市場は消費購買層を失い混乱していた。香港ナマコ市場、年間最大の繁盛期である新春でも客足が遠のき、売上が伸び悩み、不安感が香港市場に満ち溢れていた。

現在は中国経済への不安が若干解消され、新春明けから徐々に客足が戻り始め、少しずつではあるが回復の兆しが見えてきてはいるものの、輸入ナマコの集積地だったこともあり金融危機以前に高値で仕入れた在庫が多量に有り余っており、赤字必至の困難な状態は続いている。

2) ナマコ市場のダメージ

一方、広東省広州市にある中国最大の輸入ナマコ市場「一徳路」では新春直前から状況が急転し、中国各地から例年と同様にナマコ業者が参集し賑わい始め、新春後も好景気時よりは客足は少ないものの活気を取り戻しつつあるように見えた。

とはいえ市場関係者の話ではナマコ取引には次のような変化が生まれている。「昨年後半よりは売上は伸びているし、高値で折り合いがつくことも多い。しかし、以前は100kg～200kgの注文が5kg～50kgという小口注文になるのがほとんどで、1回毎の取引量が少なくなっている。取引先も昨年の金融危機が及ぼした恐怖感の影響で慎重になっていて、1回目の商品が完売してから2回目の商品を発注してくるため、お互いに労力と忍耐が必要になっている。品質やサイズについても厳しい注文が多く、品質が悪いとまったく商談にならない。以前よりはましたが返品やクレームの対応なども多く、困難な問題が多い。」こうした状況なのである。

3) 2009年のナマコ市場の変化とニーズ

2008年は不況と需要減少からナマコ市場のニーズは大きく変化し、以前のようなナマコであれば値が付くという状態とは違って変わり、産地のブランド名、品質などが最も要求されてることになった。

以前は急激な需要増から中国国内では品質は特にこだわらず「量」が重視され、中期では「ブランドや産地、それに伴う価格」が重んじられた。現在は「品質」が重んじられる。初期のナマコ製品は中国で品質が軽視されがちだったため容易に製造できると考えられ、日本ではナマコメーカーの新規参入が多くなった。そのため、高品質のナマコも粗悪品も香港で混同され市場に提供されるようになる。中期になると粗悪品を嫌い、産地や加工メーカーを指定するようになった。

4) ナマコニーズの特徴

現在は、各ナマコ輸入業者、問屋、加工メーカーは製品の品質をこと細かく検証している。市場価格が高騰しニーズの安定感がないこともあり、クレームも増え、少々の問題でもトラブルになることが増えた。

現在のニーズも根本的には同じであるが、昨年と違い中国経済の回復感と消費に対する安心感が市場にあり、数量が限定的で人気が高く、最も高値であった北海道産ナマコのみが、かなり相場を回復させてきている。昨年末からのナマコ取引量の減少、ナマコ価格の低迷などナマコを取り巻く環境の変化の中でも北海道産ナマコ製品は大きな影響を受けずに推移してきた。形状の特異性に由来するとはいえ一人勝ちの様相を呈してきたことは間違いない。

5) 北海道産ナマコ以外へのニーズ

北海道産以外のナマコに関して新たに求められているのはサイズである。以前は中型から大型が人気であったが、現在は小型から中型の需要が多い。ナマコ料理は基

本的に一品料理で一皿に一匹が普通であり、好景気時には一皿単価が高い大型が主流であった。

現在のように景気が低迷してくると単価の高い大型を嫌い、小型でも安価に食べる事のできる中小サイズが主流になってきている。そのためサイズ別の相場が形成され、値段交渉時に全体アソート価格ではなく細かいサイズ別の値段交渉が必要になっている。

大きな問題として大型が多く水揚げされる青森県産ナマコの場合などでは平均単価を極端に下げて販売せざるをえない状況もある。しかし品質の評価が高い場合には、大型のみの発注もあり、また値段をサイズ別に設定することなく取引を行っている青森県内企業もいくつかあることにも注意しておきたい。

5. 青森県産ナマコの現状と今後の展開・方向

1) 青森県産ナマコへのニーズ

青森県産ナマコは北海道産に次いで中国で非常に人気が高いブランドであった。青森県産ナマコは漁獲量も安定していたため、加工業者も近域のみならず全国から青森県産ナマコに殺到した。中国本土からもナマコ業者、貿易商社、水産加工業者などが日本の加工業者と連携したり、または出資し、原料の入札から直接参加するようになってきた。

そのため浜値が異常に高騰し、各漁協、生産者も集中的にかつ大量に漁獲し、漁獲総数量が毎年増加、製品も急激に高級品となってきたのである(表1)。

そうした動きの中で、底流では違う流れが徐々に大きくなっていった。中国産養殖ナマコは青森県産ナマコによく似ており、養殖ナマコが大量に流通するようになってから極端にマーケットからのニーズが減少した。

市場価格も不安定になり、以前には考えられないほど安値で推移してきたのである。これまでは青森県産ナマコは、7月から8月に多く流通していたが、2008年になると流通速度が鈍化するようになったのである。

このように2008年初期まで北海道産ナマコに次ぐ人気で日本産ナマコでは大きなシェアをもっていた青森産ナマコは、中国産養殖ナマコに押され2008年中期には急激に値を下げてしまった。それは乾燥ナマコ、塩蔵ナマコ問わずに同様の傾向となった。多くの国内ナマコ加工業者やナマコ輸出業者が在庫を抱え、販路開拓に東奔西走することとなった。これまで中国人バイヤーなどから注文が殺到した塩蔵ナマコについても、引きがほとんど無くなり、塩蔵ナマコ加工業者は多くの在庫を抱えた。その結果浜値も大幅な下落となり、いわゆるナマコバブルの終焉がマスコミから喧伝されることになった(表2)。

2) 青森県産ナマコの明るい兆し

とはいえ現在は年末の重なるしいナマコ業界の雰囲気から明るい兆しも感じられるようになってきている。

それは、青森県産ナマコと競合していた中国産養殖ナマコとの比較で優位な立場が生まれつつあるためと言え

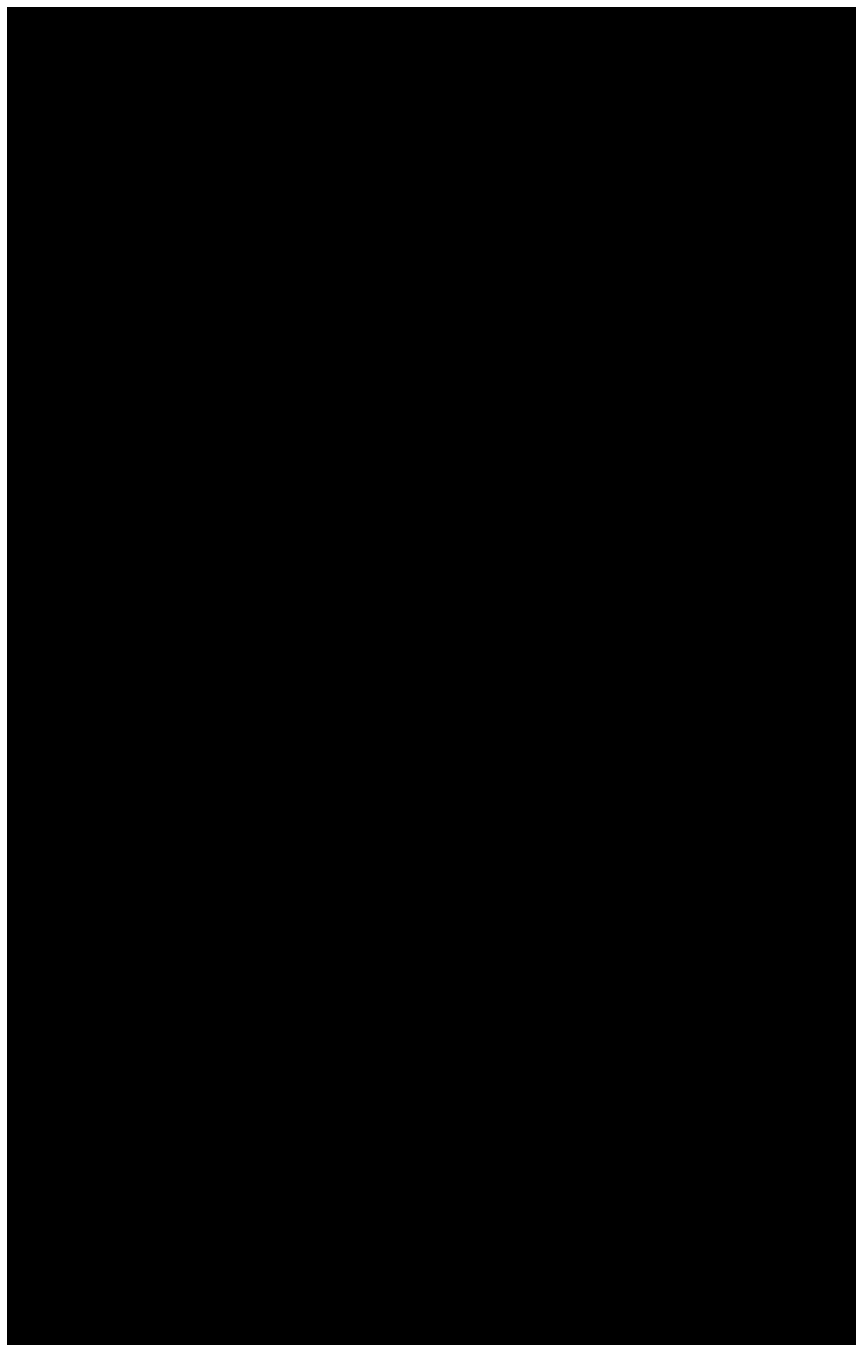


表1 ナマコ資源減少を伝える新聞（東奥日報、2009. 4. 22 夕刊）

る。優位な立場とは中国産養殖ナマコに比べ、ナマコの品質としては肉厚であること、それに加え価格的にも安価なことなどである。また乾燥ナマコ製品価値では中国産養殖ナマコに比べて品質的に優れていることが認識されているためである。つまり、現在青森県産ナマコは中国産養殖ナマコよりも価格的にも品質的にも買い得感が生まれている。

青森県内の漁連や単協は安値に衝撃を受け、その前途を憂慮しているが、しかしながらこれまでのナマコの浜値、あるいは塩蔵や乾燥ナマコの価格は、異常とも言える高値で推移してきたとも評価できることから、価格下落は確かにその影響は深刻ではあるが、現在のほうが正常になったとも思われる。

このように青森県産ナマコの現状は中国産養殖ナマコとの競合で追い詰められているとの評価ではなく、最近の価格面での手頃感と品質の高さにより、逆に中国産養殖ナマコが青森県産ナマコに押される格好になり、これからの中国産養殖ナマコにとっては青森県産ナマコは大きな脅威になるのではないかと考えられる。

形状が中国産養殖ナマコと似ており、それ故に中国産養殖ナマコの中に埋没するのではないかと危惧される面もあった青森県産ナマコであるが、その需要動向を見ると、今後は中国産養殖ナマコと青森県産ナマコとは需要先が二分化されてゆくと考えられる。その意味で青森県産ナマコのブランド化への取り組みとその流通対策が求められている。

3) 加工から見たいくつかの課題

乾燥ナマコの一級品を作るにあたっての問題点として、高く買った商品・高い商品に対する浜値の対応や意識の低さ、主に採取加工業者としての管理体制の甘さがあげられる。いくら加工技術が良くても、浜の原料が良くなければ本当にいいものは作れない。現在、加工技術においてはどこも同じくらいのレベルではないか、特別な技術より真面目につくってれば良い物はできると加工関係者は強調している。

また、行政の対応としては、小さすぎるナマコを保留、捕獲しないように指導すべき点がある。小さすぎるナマコの採取は重要な問題である。正規の漁業者ではない人が取ったりしている。またダイバーも小さいものを取ってきてしまう。小さいナマコに関しては加工業者は取引上の関係があるため、強く言えない現状がある。

さらに、刺し網での採取の際、ナマコについてしまう傷の問題もあげられる。青森県では各単協での規制が難しい。しかし、北海道は厳しい規制が行われている。今後の陸奥湾ナマコのブランド化を考えると傷のあるナマコは大きな痛手となっている。現在おおよそ全体の10%は刺し網による傷ナマコがあると見ている関係者もいる(写真8)。



写真8 傷が付いた塩蔵ナマコ

6. 陸奥湾でのナマコ資源管理の方向と流通・販売対策

1) 求められる陸奥湾全体の取り組み

陸奥湾においては、資源管理の取り組みは各産地が独自に行っている。そのため、地域によってはナマコの小型化や資源量の減少など、短期利潤目的による乱獲などが表面化してきた。それゆえ、今後の陸奥湾産ナマコの安定供給のために、より厳格な漁獲体制の見直しが必要な時期にきている。これには、これまでの各産地独自の資源管理ではなく、陸奥湾の産地全体の取り組みが必要である。

2) 塩蔵加工の問題

また、加工業者においても浜値の高騰により、これまでの乾燥ナマコの加工から利益確保のために塩蔵ナマコの加工が急増してきた。しかし、現在陸奥湾の大半を占める塩蔵ナマコは、陸奥湾産ナマコの良品質であることや青森産であるブランドをアピールすることができない。今後ナマコを産業として育てていくためにも、塩蔵ナマコの利用価値の再検討が必要である。また、前述したように加工において高品質のものを製造するためには、採取の際ナマコに傷をつけないなどの生産者側の獲った後の管理体制の問題には、漁業者の協力が必要となってくる。

3) 中国への輸出戦略の構築

ナマコバブルはひと段落したとしても、現在も中国におけるナマコの消費は増加しており、今後も中国の経済成長とともにさらに増加すると考えられることから、陸奥湾ナマコをどのような方向へ持っていくか産地・加工業者が一体となった取り組みが求められている。

現在陸奥湾では価格が低下してきており、中国における需要も減少している。そのため、需要が減少傾向にある陸奥湾ナマコを、今後資源を守りつつどういった特徴を出していくかが問われている。陸奥湾ナマコは天然でイボ立ちがよく肉厚であること、加工においても乾燥技術が確立していることが特徴としてあげられる。中国では天然かつ高品質であるナマコへの需要が高まっている。我々の調査では東北部中心都市ハルビン、中部、そして西部の各都市においても高品質の陸奥湾産乾燥ナマコは贈答用として取引されていることから、加工業者は乾燥加工の再開を望んでいる。さらに中国への直接販売ルートの確保など、新たな戦略による陸奥湾産ナマコのブランド化などの取り組みが必要となっている。

また、日本の加工業者も積極的な加工品作りなど、海外の市場に頼りすぎない国内におけるナマコ需要の創出へより一層積極的に取り組む必要がある。これまで、ナマコは輸出拡大により注目されることとなったが、今後は輸出に依存しすぎることなく、国内外ともに新たな需要の創出に取り組むべき時期を向かえていると言える。

4) 今後の陸奥湾のナマコ戦略について

最後にこれからの陸奥湾ナマコ戦略のポイントを列記しておきたい。

- (1) ナマコの管理運営を基にした、ナマコの1次・2次・3次産業における売り上げ拡大と雇用創出の実施
- ・生産―加工―流通―販売の一貫体系の管理運営を構築する。これにより、(1)ナマコの漁家における所得の向上と担い手育成、(2)ナマコ加工業の強化とナマコ関連会社との連携販促活動の実施、(3)旅行業等のサービス業との連携による陸奥湾ナマコ需要喚起事業を実施し、1次・2次・3次産業における売上拡大と雇用拡大を図る。
 - ・とりわけ、2010年の東北新幹線新青森駅開業に伴い交流入口の増加が予想され、飲食・宿泊・小売業の需要が拡大すると見込まれる。この好機に、ナマコの生食、加工品需要を喚起し、上記産業の活性化と雇用創出を図る。また中国におけるナマコ需要の更なる拡大等を踏まえ、国内外へのナマコの販路拡大を図る。
- (2) 弘前大学との包括的協定に基づいたナマコの機能性研究の実施と高度加工製品の開発
- ・青森市と弘前大学では、「弘前大学との包括的協定締結に基づくナマコの共同調査・研究」を実施しており、その中でも、ナマコの機能性に関する研究（ナマコのタンパク成分分析等）を進めている。これら機能性研究を踏まえ、また健康志向の高まりや超高齢化社会の到来・団塊世代の退職を機にした健康補助食品、医薬品等の高度加工製品の開発を行う。

- (3) 大連との都市連携から始まる国際交流都市青森の構築
- ・陸奥湾ナマコのブランド化による効果は、国内需要のみならず、海外需要、とりわけ中国需要に大きな影響を及ぼす。また、陸奥湾地域の自然、青森りんごを始めとした青森の農産物のブランド化、ねぶた祭りを中心とした地域文化は、海外都市との連携・交流と、当該地域の持続的な活性化へとつながるものである。したがって、ナマコを始めとする陸奥湾地域の海外PR、販路開拓を積極的に行うことで、青森空港を活用した観光客の誘致等を進める。
- (4) 陸奥湾の環境対策への取り組み
- ・閉鎖性の高い陸奥湾において、ナマコによる浄化作用は、陸奥湾全体の資源管理・環境保全とも密接にかかわるものである。ナマコ産業の活性化については、陸奥湾の環境保全面からの検討を進めるために、陸奥湾地域の活性化や資源管理などを総合マネジメントを検討する組織を設立して、陸奥湾の地域活性化や環境保全等に関連する団体と連携し、情報交換を行うことが必要である。

【参考資料】

- 桜井 研：日本食品等海外市場開拓事業に係る市場動向の現地調査報告書 平成16年1月
- 日本政策投資銀行北海道支店：道産食品の中華経済圏への輸出に関する考察 平成19年6月
- 村下公一：対中国・アジア圏アライアンス戦略（私案）青森県庁 平成16年12月

Recent situation of China's sea cucumber fishery and the response of Mutsu Bay's sea cucumber fishery

Chousei SHIBUYA

Department of Agriculture and Horticulture, *Faculty of Agriculture & Life Science,*
Hirosaki University, Hirosaki 036-8561, Japan

(Received for publication November 8, 2009)

Due primarily to the powerful impact of the global economic crisis that began in the U.S. last year and the rapid increase in the amount of farmed sea cucumbers in China, China's domestic sea cucumber market was losing its customers at the end of last year. Japanese products would not sell at the stage of import wholesale in China, which caused the processing industry in Japan to suffer from oversupply. This engendered a sharp decline in prices at the ports of landing in Japan, particularly in Mutsu Bay and the coast of the Seto Inland Sea. The ports that had flourished because of the sea cucumber boom in the past entered the year with anxiety from their uncertain prospects.

On the other hand, even under such circumstances, there has been some movement of the products such as new demand for the Mutsu Bay sea cucumbers that began around the end of last year. Changes in demand trends in China have also become apparent.

From early January to early February, China's domestic sea cucumber market began, although slowly, to exhibit some signs of recovery. Currently, the sea cucumber market of China appears to be regaining its strength. Nevertheless, it is too early to determine the degree of this rise exactly. At the very least, the gloomy atmosphere that prevailed in the sea cucumber industry at the end of last year seems to be easing now with some positive indication.

This change in expectations is attributable to the fact that sea cucumbers from Aomori have been establishing advantages over the farmed sea cucumbers from China that have been their competitors. In fact, Aomori sea cucumbers are thicker and meatier than their Chinese counterparts. Moreover, they are more affordable. In addition, the quality of Aomori's dried sea cucumber products is considered higher than that of the Chinese equivalent. In other words, the Aomori sea cucumbers are now benefited by a sense of value, both in price and quality, that is higher than that of the farmed sea cucumbers of China.

Different from the past, the current state of Aomori sea cucumbers, therefore, is that they can exert market power over Chinese sea cucumber producers with their affordability and quality, which are likely to be a serious threat to Chinese producers in the future.

The sources of demand for the Chinese and Aomori sea cucumbers are expected to be divisible into two in the future. In this sense, establishing the Aomori sea cucumber brand and distribution channels has become extremely important.